『九州大学言語学論集』第30号(2009. 12), 107-117

トルコ語における疑問詞を含む文のピッチパターン*
ーフォーカスの関わる韻律範疇形成ー

佐藤 久美子
(九州大学大学院)
xiao3de@hotmail.com

キーワード：トルコ語、韻律範疇、ピッチパターン、疑問詞、フォーカス

1. はじめに

多くの言語において、文中に、疑問詞や対比の表現といったフォーカスを受けた要素が含まれるとき、その要素は音声的に卓立する。これまでの研究では、個別言語ごとに多様に実現する音声的な卓立を記述するため、フォーカスに言及する様々な音韻規則・制約が提案されてきた。例えば、Nagahara (1994) が日本語東京方言において仮定した韻律句境界の挿入・削除規則や、Kubo (2005) の福岡方言における Minor Phrase 形成規則が挙げられる。これらは、直接フォーカスに言及した韻律範疇形成規則である。

このような個別言語ごとに提案された規則・制約に対して、Truckenbrodt (1995, 1999), Selkirk (2006)は、音韻論がフォーカスをどのように参照するのか、という問題に取り組んだ。そして、「フォーカスは、その作用領域内で最もプロミネントでなければならない」という普遍的な制約があることを主張した。これは Focus Prominence 理論と呼ばれる。この制約の違反回避の方法は個別言語ごとに異なっており、このことが音声的な卓立の多様性を生み出すとされる。

本論では、トルコ語の疑問詞を含む文の音調を観察する。次節以降で詳述する通り、トルコ語では、東京方言と同様に、韻律範疇の形成に言及することで、制約違反を回避している。本論文では、以下の二点について議論する。

コンサルタントは、以下の二人である。
Fatih Özer (21 歳・男性): 生後 20 日から現在まで İstanbul に在住
Ceyhun Baltacı (28 歳・男性): 22 歳まで Ankara に在住

(1) a. トルコ語において、フォーカスと韻律範疇との関係はどのようであるのか。

b. トルコ語において、音韻論的なフォーカスの作用領域はどのように決まっているのか。

2 節では、これまでに記述されているトルコ語の音調現象と、それを記述するために仮定されている韻律範疇について論じる。3 節では、フォーカスを含む文のピッチの様相を観察し、上記の二つの問題に言及する。4 節ではまとめと課題を述べる。

2. トルコ語で仮定されている韻律範疇

トルコ語の音調研究については、以前より、語のストレス位置に関する記述が多くの研究者によって行われている (Lees 1961, Lewis 1967, Sezer 1983)。近年では、語よりも大きな単位に見られる現象が扱われ、それに基づき韻律範疇形成に関する議論がなされている (Kabak & Vogel 2001, Göksel & Kerslake 2005) 。本節では、これまで研究を概観する。

2.1. 語レベルのピッチパターン

2.2.1. regular root と irregular root (Lees 1961, Lewis 1967, Sezer 1983 など)

トルコ語の名詞は、表面的な音調パターンにより、二種類に分類される。最終音節にストレスをもつ regular root と、それ以外の音節にストレスを持つ irregular root である。regular root に接辞が後続した場合、ストレスが接辞にシフトする。一方、irregular root ではそのようなシフトが起こらない。

(2) regular root

a. okúl 「学校」
学校

b. okul-úm 「私の学校」
学校- POSS.1sg

c. okul-um-dán 「私の学校から」
学校-POSS.1sg-DAT

(3) irregular root

a. bánka 「銀行」
銀行

b. bánka-m 「私の銀行」
銀行-POSS.1sg

c. bánka-m-dan 「私の銀行から」
銀行-POSS.1sg-DAT

2.1.2. Levi (2005)

トルコ語のストレスパターンの違いは、以前より記述が行われてきた。しかし、その一方で、トルコ語のストレスが音声的にどのように実現するのかという問題に関しては、十分な研究がなされていない。この問題に対して、Levi (2005) は、音響音声学的な立場から分析を行い、regular root と irregular root では、ピッチの違いが顕著に認められることを明らかにした。regular root では最終音節でわずかなピッチの上昇が観察され、irregular root では、最終音節以外の音節にピッチの上昇と下降が観察される[1]。本論では、Levi (2005)に従い、ピッチの観察に基づいて韻律範疇境界の分析を進める。

2.2. Phonological Word

Kabak & Vogel (2001) は、最大一つのストレスを持つ範囲を規定するために、Phonological Word (以下、例では PW とする)という韻律範疇を仮定した。そして、Phonological Word を(4)のように定義している。

(4) The PW consists of a root + (most) suffixes[2]

(Kabak & Vogel 2001, p. 324, (13))

(5) regular root

a. $(\text{okúl})_{PW}$ 「学校」

b. $(\text{okul-úm})_{PW}$ 「私の学校」

c. $(\text{okul-um-dán})_{PW}$ 「私の学校から」

---

[1] 佐藤 (2009)では、regular root に見られるわずかなピッチの上昇を、音韻句の境界トーンの実現として分析している。

[2] いくつかの接辞は、Phonological Word に含まれないもの (Phonological Word Adjoiners) として語彙的に指定されていると仮定している (Kabak & Vogel (2001))。

(6) irregular root

a. (bánka)$_{PW}$ 「銀行」

b. (bánka-m)$_{PW}$ 「私の銀行」

c. (bánka-m-dan)$_{PW}$ 「私の銀行から」

2.3 Phonological Word より大きな韻律範疇

これまでのトルコ語の音調研究の対象となるのは語レベルの現象がほとんどであり、句・文レベルを対象とした研究は十分に行われているとは言えない。ここでは、Kabak & Vogel (2001)と Göksel & Kerslake (2005) の観察した語レベル以上に見られるピッチパターンと、それに基づいて仮定された Phonological Phrase と Intonational Phrase に言及する。

2.3.1. Phonological Phrase (Kabak and Vogel 2005)

二つの語からなる句では、二つ目の語のストレスは弱化する。

(7) a. kırmı**zí** çantá 「赤いかばん」
赤い　かばん

b. **sűt** beyáz-dır 「牛乳は白い」
牛乳　白い-COP

(Kabak & Vogel 2001, p. 339, (37), (38))

この弱化現象が起こる範囲として、Kabak & Vogel (2001) は Phonological Word よりも大きな韻律範疇である Phonological Phrase を仮定している。Phonological Phrase は一つ以上の Phonological Word から成る。

(8) a. ((kırmı**zí**)$_{PW}$ (çantá)$_{PW}$)$_{PP}$

b. ((**sűt**)$_{PW}$ (beyáz)$_{PW}$)$_{PP}$

ただし、Kabak and Vogel (2001)では、Phonological Phrase がどのような仕組みで形成されるかについては論じられていない。

2.3.2. Intonation Phrase (Göksel & Kerslake 2005)

Göksel & Kerslake (2005)では、トルコ語には三種類の intonation contour が存在することを指摘している。そして、一つの intonation contour が付与される範囲として、Intonational Phrase を仮定している。ここでは、陳述の

Intonation contour と、疑問詞を含む疑問文における Intonation contour の例を挙げる。

陳述で見られる標準的な intonation contour は、「述語の直前でピッチがわずかに高くなり、文末で下降する」というものである。

(9) (Gizem dondurma ye-di)$_{IP}$
ギゼム.NOM アイスクリーム.ACC 食べる-PAST.3sg
「ギゼムがアイスクリームを食べた」

また、疑問詞疑問文では、「疑問詞でわずかにピッチの上昇が起こり、文末で下降と上昇が起こる」という intonation contour が見られる。

(10) (Her gün **nereye** gid-iyor-sun ↑)$_{IP}$
毎日 どこへ 行く-PROG-2sg
「毎日どこへ行くの？」

Göksel & Kerslake (2005)では、必ずしも、一つの文が一つの Intonational Phrase になるわけではないと述べられている。しかし、Intonational Phrase がどのように形成されるかという問題には言及していない。

本論では、トルコ語における韻律範疇として、暫定的に上で見た三つを認め、次のような階層となっていると仮定する。

(11) Phonological Word < Phonological Phrase < Intonational Phrase

それぞれの韻律範疇と、それが関る音声特徴は(12)の通りである。

(12) Phonological Word: 最大一つのストレスを担う単位
Phonological Phrase: ストレスの弱化が起こる単位
Intonational Phrase: Intonation Contour を担う単位

3. フォーカスと韻律範疇

3.1. フォーカスと韻律範疇境界

Göksel & Kerslake (2005)で観察されている通り、文中に語彙的にフォーカスを受けている疑問詞が含まれるとき、疑問詞でピッチの上昇が起こる。

それは、疑問詞が文中のどこにあっても同様である。

(13) a. Dondurma-yı **KiM** ye-di ↑
アイスクリーム-ACC 誰.NOM 食べる-PAST.3sg
「誰がアイスクリームを食べたの？」

b. **KiM** dondurma-yı ye-di ↑
誰.NOM アイスクリーム.ACC 食べる-PAST.3sg

ここで注目したいのは、疑問詞以外の語においてピッチの上昇が見られないという点である。すなわち、これは、(12)で述べた Phonological Word に見られる音声特徴である。このことから、トルコ語において、フォーカスを含む文では、全体が一つの Phonological Word を形成している可能性が示唆される。

(14) a. (Dondurma-yı **KíM** ye-di)$_{PW}$
b. (**KíM** dondurma-yı ye-di)$_{PW}$

3.2. 音韻論的なフォーカスの作用領域

トルコ語を福岡方言と比較すると、音韻論的なフォーカスの作用領域に関して、非常に興味深い現象が観察される。以下では、Kubo (2005) の福岡方言の研究と比較してトルコ語の特徴を述べる。

3.2.1. 福岡方言 (Kubo 2005)

福岡方言では、疑問詞を含む疑問文において、疑問詞の右側では、語彙的アクセントが実現せず、高く平らなピッチが続く (Hayata 1985)。Kubo (2005)に従い、一つのアクセントが実現する範囲を Minor Phrase と呼ぶ。

(15) a. (Kyo'o)$_{MiP}$(bi'iru)$_{MiP}$(no'nda)$_{MiP}$
b. (Kyo'o)$_{MiP}$(**dare**-ga biiru nonda)$_{MiP}$

Kubo (2005)は、従属節に疑問詞がある場合、このようなアクセントの中和は、文末までは続かず、従属節末までであることを指摘し、この現象を「疑問詞から[+WH]を持つ補文標識までが一つの Minor Phrase になる」と分析している。

(16) a. (dare-ga biiru nonda-ka)$_{MiP}$(sittoo)$_{MiP}$

b. *(darega biiru nonda-ka sittoo)$_{MiP}$

すなわち、福岡方言では、フォーカスの音韻論的な作用領域は従属節内であると考えられる。

(17) Minor Phrase の形成

[	[WH	COMP]	]
(	)(	)(	)
*(	)(		)

3.2.2. トルコ語

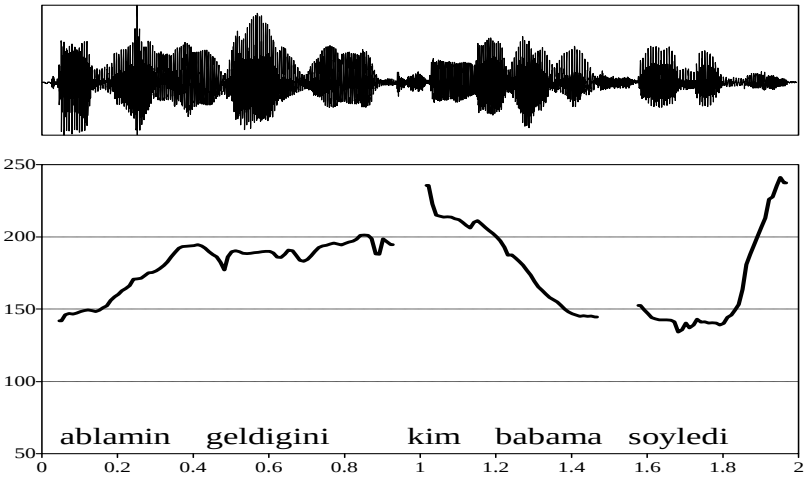
トルコでは、従属節内に疑問詞があるとき、文頭から疑問詞までピッチが上昇し、そして、文末に向けてピッチが下降する。博多方言とは異なり、「疑問詞から補文標識まで」という範囲を述べる必要がない。

(18) [~~Abla-m-ın gel-dığ-ın-ı~~] **KİM** baba~~-m-a söyle-di~~ ↑

姉-POSS.1sg-GEN 来る-VN-POSS.3sg-ACC 誰.NOM 父-POSS.1sg-ABL 話す-PAST.3sg

「姉が来たことを**誰が**父に話したの？」

(19) (18)の F0

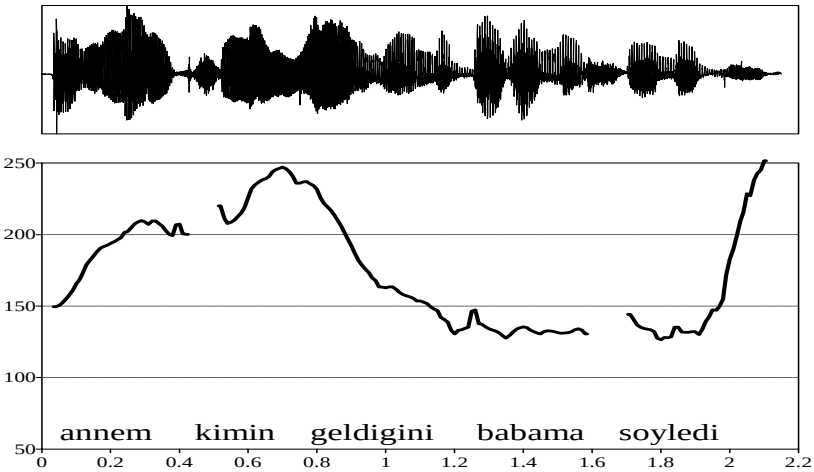


(20)　　~~Anne~~-m [**KIM**-in ~~gel-diğ-in]-i baba-m-a söyle-di~~ ↑

母-POSS.1sg.NOM　誰-GEN　来る-VN-POSS.3sg-ACC　父-POSS.1sg-ABL　話す-PAST.3sg

「母は**誰が**来たのかを父に話した」

(21)　　(20)の F0



すなわち、トルコ語では、音韻論的なフォーカスの作用領域は、文全体であると考えることができる。

(22)　　韻律語の形成

[　　[WH　　COMP]　　]

(　　)

4. まとめと課題

本論では、Truckenbrodt (1995, 1999), Selkirk (2006)が提案した Focus Prominence 理論を支持し、トルコ語では「フォーカスは、その作用領域内で最もプロミネントでなければならない」という普遍的な制約の違反回避がどのようになされているのかという問題を議論した。具体的には、トルコ語の疑問詞を含む文の音調を観察し、トルコ語では、韻律範疇の形成に言及することで、制約違反を回避していることを述べた。

第 2 節で提起した問題を以下に繰り返す。

(1) a. トルコ語において、フォーカスと韻律範疇境界との関係はどのようであるのか。

b. トルコ語において、音韻論的なフォーカスの作用領域はどのように決まっているのか。

本論では、(1a)に関して、フォーカスに関る韻律範疇が Phonological Word である可能性を示唆した。(1b)に関しては、文全体であることを示した。

今後の課題としては、(12)についてより考察を深めることである。トルコ語における語レベル以上の音調現象を詳細に観察し、その上でフォーカスに関る現象を扱う必要がある。

謝辞

本論文で挙げた音声データは、Fatih Özer 氏と Ceyhun Baltacı 氏によるものです。調査協力の依頼を快諾してくださった両氏に感謝いたします。また、本論文を執筆するにあたり、査読者から大変貴重なコメントをいただきました。論文の改定を行う上で、大いに参考にさせて頂きました。ここに記して感謝申し上げます。もちろん、本論文にある一切の誤りは全て筆者の責任です。なお、本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費（基盤研究（A）課題番号 21251006）の補助を受けております。

参照文献

Göksel, Aslı and Kerslake Celia (2005) *Turkish: a comprehensive grammar*. New York: Routledge.

Kabak, Barış and Irene Vogel (2001) The phonological word and stress assignment in Turkish. *Phonology* 18. 315-360.

Kubo, Tomoyuki (2005) Syntax-phonology interfaces in Busan Korean and Fukuoka Japanese. In Shigeki Kaji (ed.), *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena*: *Historical Development, Tone-Syntax Interface, and Descriptive* 30 *Studies*. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), 195-209.

Levi, Susannah V (2005) Acoustic correlate of lexical accent in Turkish. *Journal of the International Phonetic Association* 35, 1. 73-97.

Lewis, Geoffrey L (1967) *Turkish grammar*. Oxford: Oxford University Press.

Lees, Robert. B. (1961) *The Phonology of Modern Standard Turkish*. Bloomington: Indiana University Press.

Nagahara, Hiroyuki (1994) *Phonological Phrasing in Japanese*. Doctoral dissertation, University of California, Los Angels.

Selkirk, Elisabeth O (2006) Bengali intonation revisited: An optimality theoretic analysis in which focus stress prominence drives focus phrasing. In *Topic and focus: a cross-linguistic perspective*, eds. Chung-Min Lee, Matthew Gordon and Daniel Buering, 217-246. Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.

Sezer, Engin (1983) On non-final stress in Turkish. *Journal of Turkish Studies* 5. 61-69.

Truckenbrodt, Hubert (1995) *Phonological phrase: their relation to syntax，focus，and prominence*. Doctoral dissertation, MIT.

Truckenbrodt, Hubert (1999) On the relation between syntactic phrase and phonological phrase. *LI* 30: 219-255.

佐藤久美子 (2009) 「トルコ語における名詞のストレスの「揺れ」について」『日本音声学会第 23 回予稿集』. pp. 121-126.

早田輝洋 (1985). 『博多方言のアクセント・形態論』福岡: 九州大学出版会.

The Focus Related Phonological Phrasing in Turkish *Wh*-Question Sentences

Kumiko SATO
(Kyushu University)

Focused constituents such as *Wh*-words and contrastive expressions receive prosodic prominence in many languages. The phonetic realization of the prominence varies in a wide range of variations across languages.

This paper investigates the pitch pattern of *Wh*-question sentences in Turkish. Furthermore, based on the facts found, this paper discusses the following two points: (i) What is the relation between focus and phonological phrasing, (ii) What is the phonological domain of focus.

(初稿受理日　2009 年 4 月 1 日　　最終稿受理日　2009 年 11 月 10 日)